

# 服部健二教授 略歴 主要著書・論文目録

## 略 歴

- 一九四六年一二月 大阪市旭区に生まれる  
一九六六年三月 大阪府立北野高等学校卒業  
一九六六年四月 四国学院大学文学部英文学科入学  
一九七一年三月 四国学院大学文学部人文学科卒業  
一九七一年四月 立命館大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程入学  
一九七四年三月 立命館大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程修了  
一九七四年四月 立命館大学大学院文学研究科西洋哲学専攻博士課程入学  
一九七七年三月 立命館大学大学院文学研究科西洋哲学専攻博士課程満期退学

## 職 歴

- 一九七八年四月 立命館大学文学部 非常勤講師 (至一九八一年三月)  
一九七八年四月 摂南大学工学部 非常勤講師 (至一九八一年三月)  
一九七九年四月 京都学園大学 非常勤講師 (至一九八一年三月)  
一九八〇年四月 京都府保健婦専門学校 非常勤講師 (至一九八一年三月)  
一九八一年四月 立命館大学文学部 助教 (至一九九一年三月)  
一九九〇年九月 フランクフルト大学哲学部 客員研究員 (至一九九一年八月)  
一九九一年四月 立命館大学文学部 教授 (至二〇〇〇年三月)  
一九九三年一月 学校法人四国学院 評議員 (至一九九九年一月)  
一九九七年四月 立命館大学 文学部長、理事 (至一九九九年三月)  
一九九七年四月 学校法人立命館 評議員 (至一九九九年三月)

|         |               |   |                 |
|---------|---------------|---|-----------------|
| 二〇〇〇年四月 | 立命館大学理工学部     | 教 | 授(至 二〇〇一年三月)    |
| 二〇〇一年四月 | 立命館大学文学部      | 教 | 授(現在に至る)        |
| 二〇〇二年四月 | 立命館大学人文科学研究所  | 所 | 長(至 二〇〇四年三月)    |
| 二〇〇二年四月 | 学校法人立命館百年史編纂室 | 副 | 室 長(至 二〇〇七年三月)  |
| 二〇〇二年七月 | 学校法人立命館       | 評 | 議 員(至 二〇〇五年七月)  |
| 二〇〇二年一月 | 学校法人四国学院      | 理 | 事、評議員(至 二〇一年一月) |
| 二〇一一年四月 | 学校法人立命館       | 副 | 理 事 長(現在に至る)    |

### 《主要著訳書および論文》

#### I 著 書

単 著

『歴史における自然の論理』(新泉社、一九九〇年)

『西田哲学と左派の人たち』(こぶし書房、二〇〇〇年)

責任編集

『船山信一著作集』全十卷(こぶし書房、一九九八―一九九年)

「解題」著作集第一、二、三、四、五巻、「解説」第八巻および「編集後記」第十巻

単編および解説

船山信一著『日本哲学者の弁証法』(こぶし書房、一九九五年)

共 著

「党派性論争から主体性論争へ―加藤正と梅本克己を中心に」、西川長夫・中原章雄編『戦後価値の再検討』(有斐閣、一九八六年)

『西洋哲学史―理性の運命と可能性』(昭和堂、一九九四年)、第四部第三章「ヘーゲル左派」

「(四) 天皇制国家論―西田幾多郎の場合」および「(二〇) 三木清の抵抗と死」、現代思想研究会編『知識人の天皇観―天皇制の内圧を問う』(三一書房、一九九五年)

「人間の歴史的生―三木清―」、藤田正勝編『日本近代思想を学ぶ人のために』(世界思想社、一九九七年七月)

「技術論論争をめぐる」―「自然史」の観念からの考察」、加藤尚武・松山寿一編『科学技術のゆくえ』（ミネルヴァ書房、一九九九年四月）

「京都学派与马克思主义」以「左派」人物为中心」（吳光輝訳）、卞崇道・藤田正勝・高坂史郎主編『中日共同研究 东亚近代哲学的意义』（沈阳出版社、二〇〇二年八月）

「京都学派とマルクス（主義）―『左派』の人たちを中心に」、藤田正勝・卞崇道・高坂史郎編『東アジアと哲学』（ナカニシヤ出版、二〇〇三年二月）

「『京都学派・左派』像」、大橋良介編『京都学派の思想』（人文書院、二〇〇四年二月）

「感覚概念の検討―『論理学形而上学序論』講義を中心に」、フォイエルバッハの会編『フォイエルバッハの会編』自然・他者・歴史』（理想社、二〇〇四年三月）

「日本文化論の陥穽―高山岩男における〈生む・作る・成る〉の論理をめぐる」、大平祐一・桂島宣弘編『日本型社会』論の射程『帝国化』する世界のなかで』（文理閣、二〇〇五年三月）

「『歴史的人間学』とその技術論―三木哲学の再検討」、木岡伸夫・鈴木貞美編『技術と身体』（ミネルヴァ書房、二〇〇六年三月）

「フォイエルバッハ」、『哲学の歴史 第九卷 反哲学と世紀末』（中央公論新社、二〇〇七年八月）

「暴力・審判・救済―ヘーゲル哲学を参考に」、谷徹・今村仁司・マーティン・ジエイほか『暴力と人間存在』（筑摩書房、二〇〇八年八月）共 訳

（共訳者青柳雅文）、アドルノ『フッサール現象学における物的ノエマ的ものの超越』（こぶし書房、二〇〇六年四月）

（共訳者青柳雅文）、ホルクハイマー『理論哲学と実践哲学の結合子としてのカント「判断力批判」』（こぶし書房、二〇一〇年五月）

## II 論 文

「フォイエルバッハにおける自然概念」（『立命館文学』第三九四―三九五号、一九七八年）

「フォイエルバッハの自然哲学の構想と感性概念」（『立命館文学』第四一―四一四号、一九七九年）

「『純粹非理性批判』（Kritik der reinen Vernunft）としての『キリスト教の本質』」（『立命館文学』第四三七―四三八号、一九八一年）

「『キリスト教の本質』における『目的活動』と『類』との関係」（『立命館文学』第四三九―四四一号、一九八二年）

「『経済学批判要綱』におけるマルクスの自然概念についての一考察」（『立命館文学』第四六九―四七一号、一九八四年）

「ルカーチ、シュミット、ブロッホ―マルクスの自然概念についての序論的考察」（『立命館文学』第四七五―四七七号、一九八五年）

「主体としての資本の論理構造」（『立命館文学』第四九六―四九八号、一九八六年）

「『エンチクロペディ』における三つの推論」（『立命館文学』第五〇〇号、一九八七年）

「全自然史の思想について―梯経済哲学批判序説」（『立命館哲学』第二集、一九八八年）

- 「歴史における自然の弁証法―定有としての資本の論理構造に即して」(『立命館哲学』第三集、一九八九年)
- 「フォイエルバッハの『死と不死に関する諸思想』―シュライエルマツヒャー、ヘーゲルとの関係で」(『立命館文学』第五二二号、一九九二年)
- 「自我と世界の『断念』―カール・ダウプとフォイエルバッハの関係についての一考察」(『立命館文学』第五二九号、一九九三年)
- 「加藤弘之とE・ヘッケル」、(『立命館大学人文科学研究所紀要』第五九号〈『日本思想とドイツ学受容の研究』〉、一九九三年一〇月)
- 「自然の自己意識の本質―フォイエルバッハの美的世界観について―」(『理想』No.六五三、一九九四年)
- 「フォイエルバッハの『論理学・形而上学序論』について―ヘーゲル主観的精神との比較―」(『立命館文学』第五四三号、一九九六年)
- 「自然観をめぐって フォイエルバッハとマルクス」(『情況』二〇〇二年八月・九月号)
- 「唯物論』の批判的検討」(『季報唯物論研究』第八二号、二〇〇二年十一月)
- 「環境世界の人間学的構造とエコロジー課題」(『季報唯物論研究』第八五号〈服部健二責任編集号〉、二〇〇三年八月)
- Die Linken der Kyoto-Schule und ihre Rezeptionsweise des Marxismus. SYNTHESES PHILOSOPHICA 37 Zagreb 1/2004 vol.19.
- Ljevičari Kyoto-škole i njihova recepcija marksizma. FILOZOFSKA ISTRAŽIVANJA 96 God. 25 Sv.1 Zagreb 2005.
- 「帝国の形而上学」か『個性者の構想力』か」(『季報唯物論研究』第九三号、二〇〇五年八月)
- 「暴力・審判・救済―ヘーゲル哲学を参考に―」(『立命館大学人文科学研究所紀要』第八六号、二〇〇六年三月)
- 「小泉三三『山西前線』についての一試論 ―生命、人格、協同体の観点から―」(立命館百年史編纂委員会編『立命館百年史紀要』第一六号、二〇〇八年三月)
- 「『京都学派』とその『左派』の人間学の系譜について―ある時代状況のなかで―」(『立命館文学』第六〇三号、二〇〇八年三月)

### Ⅲ 書評・評論

- (書評)「船山信一訳『フォイエルバッハ全集全十八巻』(福村出版)に寄せて」、『立命館文学』第三七一―三七二号、一九七六年)
- (書評)「柴田・河上・石塚編『神の再読・自然の再読』」(『週間読書人』第二一〇八三号、一九九五年)
- (研究ノート)「マルクスとエコロジー―コヴァルツィークとインムラーの論争について」(『季報唯物論研究』第二四号、一九八七年)
- (評論)「報告2 加藤正の理論的立場について」(『季報唯物論研究』編集部編『証言 唯物論研究会事件と天皇制』新泉社、一九八九年六月)
- (評論)「田畑稔氏のアソシエーション論によせて」(『季報唯物論研究』第五三一―五四号、一九九五年)
- (研究ノート)「フランクフルト学派との対話―自然史の観念をめぐるノート」(『季報唯物論研究』第五八号〈服部健二責任編集号〉、一九九六年)
- (研究ノート)「自然史解読の試み」(『季報唯物論研究』第七三号、二〇〇〇年)
- (評論)「西田哲学と左派の人たち」(『季報唯物論研究』第七六号、二〇〇一年)

- (書評) 「吉田傑俊編・解説『戸坂潤の哲学』(こぶし書房、二〇〇一年)」「『季報唯物論研究』第七九号、二〇〇二年」  
(書評) 「高田純著『環境思想を問う』(青木書店、二〇〇三年)」「『季報唯物論研究』第九一号、二〇〇五年」  
(評論) 共著(共著者河上睦子)「総論『自然・他者・歴史』へのアプローチ」、フョイエルバッハの会編『フョイエルバッハ 自然・他者・歴史』(理想社、二〇〇四年三月)  
(書評) 「『アドルノの場所』(細見和之著、みすず書房、二〇〇四年)」「『社会思想史研究』No.三〇、二〇〇六年」

#### IV 学会報告および口頭報告

- 「フョイエルバッハの自然観」(関西哲学会第31回大会、一九七八年一〇月、神戸大学、『関西哲学会紀要』第一五冊)  
「フョイエルバッハの人間学的唯物論について、とくにヘーゲルとの関係で」(フョイエルバッハの会、一九九〇年七月)  
「京学派とマルクス(主義)―左派の人たちを中心に」、日中共同研究、国際シンポジウム「東アジアにおける近代哲学の意義」(二〇〇一年九月、京都ガーデンパレスホテル)  
「三木清との対話、時代状況と三木の死に触発されて」(三木清研究会、二〇〇二年)  
「三人のカールとフョイエルバッハ」、第二回韓日合同フョイエルバッハ研究会(二〇〇二年九月、大邱大学校)  
「形思想からみた学問の営み」、社会思想史学会シンポジウム「学問と生活世界」(二〇〇二年一〇月、東洋大学)  
「『京学派』と『マルクス主義』のかかわりについて―ある時代状況のなかで―」、唯物論研究協会第30回総会・研究大会第三分科会シンポジウム「哲学と時代への対応―戦前の京都、西田とその学派を中心に」(二〇〇七年一〇月、立命館大学)

